

経理部の岩田さん、
セレブ御曹司に捕獲される

「この領収書だと詳細がわからないので、処理できません」

経理部の廊下側に並ぶカウンター式キャビネットを挟んで、二十八歳の岩田凛子は今、営業部の男性社員と対峙している。

「詳細？ その備考欄に書いてあるでしょ」

凛子のきつぱりとしたもの言いが気に障ったのか、男性は持参した交際費精算書を顎で示した。

書いてある？ 「経費」と書いてあるこれのどこが詳細なのか。接待等やかかった交際費の精算には、取引先の会社名や参加人数、目的などを記載しなければならぬ。

それに、支払いが発生した日付は二カ月も前。おまけに、本人記入の支払日と領収書の日付が違っている。

だいたいこの「単価平均二千元」というのはなんだろう。突っ込みどころが多すぎて、いちいち指摘するのも面倒なくらいだ。

凛子が勤務する「白鷹紡績」は、れっきとした株式会社である。名前こそあまり知られてはいないが、社員数は五百余名。世界規模で事業を行っている大手繊維メーカー「HAKUYOU」の子

会社のひとつでもある。そんな大企業の傘下にいる会社の経理が、こんなお粗末な経費申請を承認していいはずがなかった。

凜子は受け取った精算書を返しながら、口を開く。

「ここに書かれている情報だけでは、経費の精算処理をするには不十分です。それに、申請者印と承認印がぜんぶ同じです」

「あのさあ……印鑑とか、どうでもよくない？　うちの上司、係長から上全員夕方まで帰ってこないだけだ」

意図的に語尾を上げた話し方と斜に構えた態度。彼の言動には、営業という花形部署に所属しているというプライドが見え隠れしている。

「どうでもよくはありません。もう一度経費精算マニュアルをよく見て、改めて申請願います。その際は、単価と人数を明記してください。もちろん、承認印も全員別の人でお願いします」

向かい合っている顔に、明らかに不機嫌そうな表情が浮かぶ。

「はいはい、わかりました」

汐々発せられた返答を聞き、凜子はくるりと踵を返した。キャビネットから机ひとつ隔てた自席に戻る途中、背後から大げさな舌打ちの音が聞こえてくる。

「つたく、可愛げのない『超合金』だなあ。そんなんだから彼氏の一人もできないんだろうよ」

わざと聞こえるように言っているのは、重々承知している。

(よけいなお世話です)

心のなかで独り言を言うと、凜子はあえて反応しないまま席に座った。そして、やりかけの仕上げ業務に取りかかる。

その様子からは、まるで感情の動きが感じられない。

実際、凜子は会社ではほぼ無表情で、喜怒哀楽を表に出すことはなかった。むしろ、人並みに感情はあるし、今だつてかなり憤りを感じている。けれど、それが人に伝わりにくいゆえに、周りには皆、凜子には感情の起伏などないと思いつ込んでいるのだ。

そんな凜子につけられたあだ名は、経理部の「超合金」――

凜子がそう呼ばれはじめたのは、入社して一年ほど経った頃のことだ。

教育係をしてくれた先輩社員が、急遽退職することになった。結果、それまで補佐的業務を行っていた凜子が、経費の精算を含む現金預金の管理と、給与に関する業務全般を担うようになる。当然、他部署社員とのかかわりも多くなり、その分軋轢も生まれやすい。

もともと几帳面な性格だし、やるからにはいつ税務調査が入ってもいいように完璧な仕事をしたいと凜子は思っている。

そもそも経理部とは、どんな小さなミスも許されない部署だ。そういった面では凜子に最適な部署だと言えるだろう。

媚びない、群れない、馴れ合わない。

そんな凜子の姿勢のせいも、一部の社員曰く、凜子の対応はガチガチに硬くて、冷ややかであるらしい。なにもわざとそうしているわけではないし、自分なりに誠意をもって対応しているつもり

だ。だけど「超合金」と呼ばれているだけあって、なかなかそれが人には伝わらない。さすがに面と向かって「超合金」と言う人はめったにいないものの、その呼び名がすでに社内中に浸透していることは凜子とて、重々承知している。

けれどその「超合金」な態度が、凜子の会社における処世術であり、仕事をする上でなるべく波風を立てせない最善の方法だった。

「岩田さん。はい」

経理部長の榎本が、通りすがりに凜子に一枚の書類を手渡ししてくる。

「これ、七月から九月までの夏季休暇取得カレンダー。あとでホワイトボードに貼っておいてくれる？」

「はい、わかりました」

受け取った書類を見て、すばやく内容を確認する。現在、経理部に所属しているのは六人。そのうち女性社員は凜子を合わせて二人だ。

六月最後の週である今の時点で、もうすでにカレンダーは休暇を示す赤い棒線でおおかた埋められている。

「休みの日程が決まっていないの、岩田さんだけだよ。予定があるなら、早めに押さえておいて」

カレンダーを覗き込みながらそう言うと、榎本は悠々と部署を出てエレベーターホールへ歩いていく。家族持ちの彼は、毎年夏になると一家そろってどこかしら海外旅行に出かけている。

（夏季休暇っていつでも、どうせ実家に帰るくらいだしなあ……）

凜子は誰とも休みが被らない八月第二週目の三日間に棒線を引いた。

身長百七十五センチ、体重五十八キロ。

女性にしては少々背が高すぎると言えなくもないが、容姿は決して悪くない。目鼻立ちはずっと整っているし、十人いれば五人は美人だと言ってくれるであろう顔をしている。

だけど、いかにせん凜子には可愛げというものが欠片かけちもなかった。そのせいか、もう八年近く恋人なしの生活を続けている。

席を立ち、カレンダーをホワイトボードに貼り終える。ふと窓を見ると、下ろされたブラインドの隙間からすつきりとした青空が見えた。

会社が入っている十三階建てのビルは「HAKUYOU」が所有している。「白鷹紡績」は、七階から十三階を使用していて、凜子が所属する経理部は八階だ。

ビルの周りは東京でも屈指のビジネス街で、外を歩けば有名企業の社員がわんさかいる。

努力すれば、気に入った誰かと話すきつかけくらいは掴めるかもしれない。けれど、凜子はそういったことにまったく興味がなかった。

過去に一度だけ、男性と付き合ったことはある。けれどそれは向こうから申し込んできて、なんとなく付き合いはじめた、というものだ。

もちろん、付き合いと決めたからには、恋人として真面目に向き合ったつもりだ。しかし、結局は心をかよわせることもなく、恋愛というにはあまりにも短くて浅い付き合いで終わってしまった。取り立てて恋人がほしいと思わないのは、そのときあまりいい別れ方をしなかったせいもあるか

もしれない。

今は仕事だけでいい。

数学教師だった母親の影響か、数字は昔から好きだ。数学は恋愛のように曖昧で不可解な部分などない。そういった意味でも、数字を扱う今の部署は、自分に合っていると思う。

経理は地味で面白みのない仕事だと言われることもあるが、ぜったいにそんなことはない。確かに営業部のような花形的な存在ではない。けれど、健全な会社経営を継続するためにはなくてはならない部署であり、まさに縁の下の力持ち的な存在だと言える。

そして、そこで扱うのはお金だ。

だからこそ、ぜったいにミスは許されない。ほんの少しの間違いが会社に多大な損害をあたえてしまうことだってある。それを未然に防ぐためにも日々気を抜かず、些細な不備であつても見逃すわけにはいかなかった。

「岩田さん、昨日言っておいた書類、もうまとまってる？」

しばらくの間パソコンでもくもくと経費の入力作業を続けていると、背後から女性主任の園田が話しかけてくる。

「はい、これです」

凜子は足元に置いていた二箱の段ボール箱を指し示す。

「そう。じゃあ、社長室に持っていつてくれる？ 私も手伝うから」

園田に促され、凜子は処理中の書類を片付けて椅子から立ち上がった。二人それぞれに段ボール

箱を抱え、エレベーターホールに向かう。突き当たりの壁が全面ガラス張りになっているそこは、

明るい日の光に満ち溢れていた。

「明日の午後、いよいよ新社長がおでましになるわね」

「そうですね」

園田が言い、凜子があいづちを打つ。

今年の春、前社長が持病の悪化のために長期入院することになった。年齢の面から考えても、彼の職場復帰は容易ではない。その結果、急遽役員たちが招集され、前社長の退任が決まった。そして、その後任として前社長の甥であり「HAKUYOU」アメリカ支社営業部長だった氷川慎之介

が新社長に就任することになったのだ。

彼は同社の創業者一族の生まれであり、父親は現在「HAKUYOU」の社長を務めている。

トップの人事には必要以上の興味などない凜子だけど、慎之介の辣腕ぶりは自然と耳に入ってきた。

今運んでいる書類は、彼が榎本に事前連絡をして閲覧を希望したものだ。

「聞いた？ 新社長って、まだ三十四歳なんだって。私より五つも年下なのに、もう子会社の社長

になるとか、すごくない？ さすが御曹司よね。イケメンで、まだ独身だっていうし……あゝあ、

私がおうちよつと若かったらなあ」

エレベーターに乗り込みながら、園田が凜子に話しかける。彼女は凜子よりも入社が五年ほど早

い。一昨年まで物流企画部において、異動で経理にやってきていた。

「もし、経理関係で呼び出しがかかったらどうしよう？ ドキドキするかも。もしものときは、岩田さんも立ち会ってね。なくんて、なにかあっても部長を呼び出して終わりだよねえ」

園田がエレベーターの壁にもたれかかりながら、大きくため息を吐く。ドキドキする、なんて言っている彼女だが、目下気楽な独身生活を満喫中であり、自ら結婚願望はないと公言している。

十三階に到着し、マホガニー色のフロアを進む。すれ違った秘書課の女性と挨拶を交わし、廊下の一番奥の社長室のドアを開けてもらった。

デスク脇に段ボールを置き、ぐるりと部屋のなかを見回す。

およそ十六畳の部屋の一角には、海外から届いた新社長の荷物と、会社ロゴが入った段ボールが積み重ねられていた。段ボール箱のなかは、おそらく各部署から届けられた書類だ。

世間でもそうであるように、ここ「白鷹紡績」でも社内文書の電子化が順次行われている。けれど、そのスピードはかなり遅い。しかも経理部だけはなぜかその流れに乗ることができず、伝票や決済書類のやり取りはまだまだに紙がメインだ。

凜子は、これまでに何度か経費精算のシステム化を申請している。

日々のルーチン業務をこなすなか、誰かが経費の精算を依頼してくると、凜子がそれまでやってきた業務がストップしてしまう。それでは効率が悪すぎるし、人件費的に考えても無駄遣いだ。文書管理の利便性やコスト削減の観点からいえば、電子化は急務のはず。

もし経費精算システムが電子化されれば、プログラムによって不正や申請ミスなどを自動的に検知することができる。

しかしながら、古参社員の「紙」びいきは、思ったよりも根が深い。彼ら曰く――

「データでのやり取りは、現実味がない」

「実際に押した印鑑が並んでこそその社内文書」

お金に関する書類は、なおさらそうであるらしい。

そんな感覚的な理由で、これまで経費精算のシステム化は何度も見送られていた。申請の仲介役である榎本は、凜子の言い分を理解してくれる。しかし、彼が何度決裁印を押しても、上層部が首を縦に振らないのだ。

（はあ……いつになったらこんな無駄がなくなるんだろう？）

これまでの申請は通らなかつたけれど、新社長就任を機に社内新しい風が吹くかもしれない。そんな希望が出てきたという意味では、凜子も今回のトップ人事を大いに歓迎するつもりだ。

用事を済ませ社長室を出た凜子は、園田と別れ一人秘書室に向かった。そして、先ほどドアの開閉に手を貸してくれた女性秘書に声をかける。

「すみません。新社長から届いた海外からの荷物の費用精算はどうなっていますか？ それと、社長室に置かれていた観葉植物が見当たりませんが、どこかに移動したんでしょうか？」

デスクに就いていた女性秘書が顔を上げる。

「あ……荷物の費用については、まだなにも伺っていません。社長室にあったベンジャミンは、たぶん前社長の荷物と一緒にご自宅に送ったんじゃないかと――」

「そうですか。あの観葉植物は、レンタルグリーンです。できるだけ早く所在の確認をしていただ

けますか？ 新社長の荷物に関しては、わかり次第連絡をお願いします」

「わかりました」

女性秘書に軽く会釈すると、凜子は踵を返してエレベーターホールに向かう。しかしエレベーターの前を素通りし、奥にある非常口のドアを開けた。

凜子は日頃から、できるだけエレベーターよりも階段を使うことにしている。さすがに地上の行き来にはエレベーターに乗るが、社内の移動はもっぱら階段利用だ。めったに人がいない階段の上り下りは、仕事の合間のリフレッシュにもなっている。

八階まで下りて、凜子は自席に戻った。そして、個人の業務スケジュール表に、新たにできた事項を付け加える。

（新社長の荷物運賃と、社長室の観葉植物の件、要確認……つと）

小さな仕事を日々こつこつこなす。派手さはない。しかし、それらを確実にこなしてこそ、完璧な年次決算へと繋がるのだ。

そうして日ごと持ち込まれる仕事をきちんと処理し続けていたら、いつの間にか入社六年目を迎えていた。

さほど変化がなく淡々とした業務内容を、つまらないと思う人は少なくないだろう。だけど、凜子はむしろそれを心地いいと感じる。仕事に対する向上心は持っているが、ようやく中堅社員になった今は、目の前の仕事をきちんとこなすことが最優先事項だ。

少し遅めの昼休みを終えて、デスクに戻る。そのタイミングで持ち込まれた仕事は、出張に伴う仮払い業務だった。

やってきたのは、営業部の黒木という男性主任だ。彼は、いつも凜子が「今だけは話しかけられたくない」というときにやってきては、なにかしら仕事を依頼してくる。

今回彼がやってきたのは、凜子が月次決算にかかわる検算をしているときだった。

「岩田さん、パパーッと仮払いお願い」

黒木が手にした書類をひらひらと振る。

（もう！ あと少しで検算が終わったのに……）

黒木に話しかけられた時点で、検算は振出しに戻った。せっかく調子よく進んでいたのに。

だけど、もうどうしようもない。凜子は潔く諦めて席を立ち、キャビネット越しに黒木と対峙する。

「わかりました」

差し出された仮払い申請書を受け取った凜子は、いつものように表情ひとつ動かさずに内容に目を通す。

そして、顔を上げる。

「黒木主任、これでは仮払いはできません」

なにがパパーッとだ。

彼は二カ月に一度は出張に行くが、毎回どこかしら不備がある申請書を提出してくる。

たった一枚の書類すら満足に記入できない社員が、はたして営業先で成果をだせるのだろうか？ そう思ったりもするが、黒木は、営業部ではできる社員としての地位を確立しているらしい。ならば、それほど成績を上げている彼が、どうしてまともな仮払い申請ができないのか――

「え、なんで？ 部長の印鑑も押してあるし、完璧でしょ？」

黒木が身を乗り出して、申請書を覗き込む。

「確かに営業部長の承認印はありますけど、この内容では処理できません」

「だから、なんで？」

「前回も言いましたが、これではいつどこに行つてなにをするのかが、いっさいわかりません。必要な項目をきちんと記入してから再度提出してください」

仮払いを申請するときには、所定の書類に必要なことを記入した上で提出する必要がある。しかし、黒木が持ってきた申請書はそれがなされていない。

「よく見てよ。備考欄に行き先とかは書いてあるでしょ。それに、日程といつても今回はたった一日だよ？ どうせもうじき月初の精算日だし、そのときにきちんとしたものを出せば問題ないだろう」

仕事上でなにかあったのか。今日の黒木は、やけに食つてかかったような言い方をしてくる。

明らかにイラついている様子の黒木に対して、凧子はいつとも以上に冷静な声で受け答えをした。

「仮払いには、行き先と目的のほかに、移動手段と区間の記入が必要です」

無表情の凧子とは対照的に、黒木は眉を上げ下げしつつ熱弁をふるい続ける。

「だから、それは精算するときに書くつて。俺は営業だよ？ 出張先では、あちこち飛び回る予定だし、場合によつては思いもよらないところに足を延ばさなきゃいけないかもしれないんだぞ」

「そういったこともある程度想定した上で申請してください。むろん、常識の範囲内です。それに、出張先での少額の交通費なら、普段どおりいったん立て替えていただくか、営業部用にお渡ししている乗車カードを使ってください」

凧子は黒木に向かって申請書を差し出す。しかし、彼はわざと明後日あさっての方角を向いて、それを取ろうとしない。

「ああ、わかつたわかつた。じゃあ、次からはそうするから、今回はこれで」

黒木は適当なことを言つて、なおも食い下がるつもりだ。繰り返される不毛なバトルには、ほとんど嫌気がさす。

しかし経理部で小口現金の出納すいとうを担当している以上、他部署社員とのこういつたやりとりは避けられない。仕事をきちんとやろうとすればするほど、どうしても煙たがられるのだ。

重箱の隅をつつくようなことをしていると言われても、それが仕事なのだからやらざるを得ない。経理部とは、そういった意味では損な役回りを担っている部署と言えるだろう。

凧子はやむを得ず、不備のある個所を指し示しながら、該当する経理規程を抜粋して唱えはじめた。

「この部分ですが、規程では――」

「ああ、もういいよ、わかりました！ もう降参して書き直してくるって」

黒木が肩をすくめ、小さく両手を上げて降参のポーズをとる。

「そう言えば岩田さん、午前中もうちの部の川村かわむらとやりあつたんだって？ 前から思ってたんだけど、ちょっと俺ら営業部に対して厳しいんじゃない？」

ようやく片付くと思ったら、今度は当てこすりだ。

凜子は書類から視線を上げ、黒木の顔を正面から見つめなおした。

「そんなつもりは一切ありません。私は経理規程のりどに則したがった申請書の記入をお願いしているだけです」

「あゝあ、出たよ超合金」

黒木がひととき大きな声を上げる。

そのとき、黒木の背後から朗はならかな男性の声が聞こえた。

「超合金？ それって、どういう意味なのかな？」

黒木の肩を、男性が片手でポンと叩く。

「は？ そりゃ、見てのとおり四角四面で融通が利かない対応ばかりする経理の——あ……しゃ、しゃちよっ……!?!」

うしろを振り向いた黒木が、いきなり素すつ頓狂とんきやうな声を上げる。

凜子は、黒木の背後にいる背の高い男性の顔を見上げた。彫りの深い、まるで美術品のように整った顔が、穏やかな微笑みを浮かべている。

(えっ？ この人が新社長？)

艶えびやかな黒髪に、高くてまっすぐな鼻筋。

めったに動揺どうごなどしない凜子だけど、突然現れた美男子を前に、さすがにちよつとだけ面食らった。

社内報で写真を見たことはある。だけど、どれもみな小さな写真だった。実物を見るのはこれからはじめてだ。

なるほど、確かにイケメンであることに間違いない。けれど、それは今、仕事にはなんの関係もない。

すぐに気を取り直した凜子は、自分に向けられた彼の目をまっすぐに見つめ返す。

「氷川社長、お疲れ様ですっ！」

黒木の裏返った声が、凜子が会え積しやくしたタイミングと被る。

「やあ、お疲れ様。それ、何の書類？ ……ふうん、仮払い申請書か」

黒木の横から書類を覗き込むと、慎之介が軽く頷いた。そして、改めて凜子に視線を向ける。

その口元に、真つ白な歯が零れた。

ここは微笑み返すべき？ そう思いながらも、日頃の無表情が板についていて、急には対処できない。

「ざっと見ただけでも、不備がふたつあるね。これじゃあ、突き返されても文句は言えないかな」

「あ……はい」

もごもごと口ごもる黒木の背後から、離席中だった榎本が現れた。そして慎之介と挨拶を交わし、凛子に状況をたずねる。すぐに把握した榎本が、書類を手にした。

「黒木君、じゃあこれ——」

榎本が、申請書を黒木に差し出す。黒木はそれを受け取り、作り笑いを浮かべながら去っていった。

「あ、氷川社長！ こちらにいらしたんですか」

黒木と入れ違いに、秘書課長がやってきて慎之介になにごとか話しかける。小柄な彼の話を聞くために、慎之介が身体を屈めた。

その様が、やけに決まっている。

凛子でも見上げるほどだから、たぶん身長は一九〇センチを超えているだろう。年齢の割に貫禄があり、見るものを圧倒する並外れたオーラがある。ダークグレーのスーツが驚くほど似合っていて、スタイルのよさはまるでパリコレのモデルだ。

こんなに完璧な容姿の男性を、凛子は見たことがなかった。

それにしても、さつきから彼とやたらと視線が合うような気がするの、どうしてだろう？

（つて、ただの気のせいだよね）

そう思うものの、やはりなんとなく居心地が悪い。用事も済んだことだし、もう席に戻ろう——そう思ったとき、慎之介の視線が、がっちり凛子を捉えた。

睨まれたわけではない。けれど、なぜか一瞬全身を射貫かれたような緊張が走った。

「じゃあ、また」

慎之介がにっこりと微笑み、凛子はもう一度軽く頭を下げた。

顔を上げ、去っていく背中を見つめる。ちよつとした放心状態に陥っている凛子の背後から、園田の感じ入ったような声が聞こえてきた。

「ちよ……、いきなり登場するなんて、びっくり！ でも、聞きしに勝るイケメンだわあ」

予定では、出社は明日の午後からだだったはずだ。それなのに意表を突いて一日早く顔を出すとかなにか意図するところでもあったのだろうか。

慎之介のおかげか、黒木はあれからすぐに必要事項を漏れなく記入した申請書を持ってきてくれた。

凛子は密かに、慎之介が顔を見せてくれたことに感謝する。

けれど、喜んでばかりはいられない。

（新社長との初対面があれって……）

「超合金」呼ばわりされているところを見られるなんて、さすがにバツが悪い。

とはいえ、彼は代表取締役社長だ。

一度会っただけの平社員のことなど、きつとすぐに忘れてしまうに違いない。今日は就任の挨拶がてら各フロアを回っていた様子だったが、今後は社長自ら経理部に來ることなどないだろう。

もし経理についてなにか質問があったとしても、園田が言ったように榎本が対応するはず。今後凛子が社長と直接かわる可能性などありはしない。

慎之介の思いがけない登場のせいで社内がなんとなくざわついているなか、凜子はいつもどおり業務をこなし、終業時間を迎えた。

明日やることの確認を終えて、凜子はテキパキとデスクの上を片付けはじめ。仕事が残っていれば、残業は厭われない。けれど、今日中にやるべきことをすべてやり終えた今、一部社員のようにデスクに居座って無駄な時間を過ごすつもりなどなかった。

『見てのとおり四角四面で融通が利かない対応ばかりする経理の——』
昼間黒木が言った言葉が、今になって小さな針となって凜子の胸をチクチクと突きさしてくる。「超合金」と呼ばれるのは今にはじまったことではないし、今さらそれについてどうこう言うつもりはない。けれど、今日はすぐそばに新社長がいたのだ。そのことが、凜子にいつも以上に精神的ダメージを与えている。

(いくら「超合金」と言われていても、私だって生身の人間なんだからね)

今でこそ「超合金」と呼ばれることに慣れてしまっているけれど、はじめからそうだったわけはない。そんな言われ方をすれば傷つくし、自分のことを振り返ってみて、どこがどう悪いのか思い悩んだことだってあった。

けれど、仕事上譲れない部分があるし、生まれ持った性格はそう簡単に変わるものでもない。

結局それを甘んじて受け入れ、聞き流すことで凜子は自分のなかで折り合いをつけた。気にならないと言え嘘になるが、いちいちよくよく考えてもはじまらないと思うようにはなっている。

それなのに、今日に限ってこんなに気落ちしているのは、やはり慎之介の立場と、彼と初対面で

あることが関係しているのだろう。

(さ、帰る帰ろー！)

忙しい新社長のことだ。凜子のことなど、もうとつくに記憶の隅に追いやられていることだろう。だから、凜子もよくよすることなどない。凜子は、意識して気持ちを切り替え、一人ロッカー室に向かった。

いつもどおり帰宅し、いつもどおり過ごして迎えた翌日。今日は六月最後の火曜日だ。

凜子が今住んでいるのは、都内にある築十五年の三階建てのマンションである。

すべての部屋がワンルームであるその、最上階角部屋に住んでもう十年になる。大学進学と同時引越してきたそこは駅から二十分と少し遠いが、治安もよく、知り合った近隣の人もいい人ばかりだ。

部屋はちよつと広めで、入居者の大半は凜子のような独身OLらしい。すぐ近くにはスーパーやコンビニがあるし、さらに歩いて十分のところに小さな公園だってある。

通勤するにも便利で、ドアツードアで一時間もかからない。そういうことで、特に引越しをする理由も見つからないまま大学卒業後も更新を繰り返し、凜子はそこに住み続けている。

唯一残念なのは、三カ月前に建ったタワーマンシヨンのせいで多少日当たりが悪くなってしまうことだろうか。

年中ほどよい陽光が入っていた住まいだったけれど、陽が入らなくなった。それまで見えていた

公園の桜も見えなくなり、洗濯物の乾きも若干悪くなった気がする。

凧子は朝食を食べながら、テレビで天気予報を確認する。今日は一日晴れるみたいだ。これなら洗濯物も問題なく乾くだろう。

窓辺に置いたアイビーにたつぷりと水をやったあと、メイクを済ませ着替えをする。

「さて、と。出かけようかな」

ローヒールの靴を履き、駅に向かう。歩き出してすぐに出会ったのは、近所の一軒家に住むおばあさんだ。

「あら。岩田さん、おはよう」

「おはようございます。この間はおすそ分けありがとうございました」

会社では「超合金」と言われている凧子だけど、プライベートまでそうであるわけではない。長く住んでいる分、近所で顔見知りになり、交流するようになった人だっている。

凧子だって根っからの「超合金」ではないのだ。

だけど、持って生まれた性格のせいか、仕事のとくに喜怒哀楽をはっきり出すことができない。社会人としてももう少し柔軟な対応ができればと思ったりもするが、こればかりはどうしようもなかった。

駅に着き、改札を通りすぎて電車に乗る。

ラッシュ時の電車は、立ち位置を確保するのも難しい。どうにか車両端のつり革を掴むと同時にベルが鳴り電車が走り出した。

目の風景をやりながら、凧子はなんとはなしに、自分のことを考えた。

友だちは多くない。けれど、長く付き合っている親友はいるし、交友関係で特別に悩むことなどなかった。

不器用な自分のことを、たまに面倒くさいと思うことはある。だけど、いつだって前向きでいようと心掛けているし、社会に対してなんら恥じることなく生きてきたことだけは確かだ。

電車を乗り継いで、会社の最寄り駅に到着した。

「白鷹紡績」の始業時間は九時だが、凧子はそれよりも少し早めに入社している。経理部がある八階フロアは女性社員が多く、そのほうがロッカー室が空いているのだ。

凧子はいつもどおりの時間にフロアに下り立ち、ロッカー室のドアを開ける。その途端、むせかえるほどの香水の匂いが流れてきた。

(ん?)

日頃香水などつけない凧子にも、これが複数の香りが入りまじったものだというくらいはわかった。

見ると、普段ならもっと遅く来るはずの女性社員たちが、すでに着替えを済ませ、各自鏡に向かって化粧直しをしている。

(いったいなにごと?)

いぶかしく思いながらも、彼女らと挨拶を交わし、自身のロッカーを開けた。着替えながら自然と耳に入ってくるのは、いつになく弾んでいる話し声だ。

「新社長って、まだ独身でしょ？ 彼女とかいるのかな？」

「どうだろう、もしかして募集中だったりして？ もしかしたら、もしかするかも〜！ 一応頑張ってみてもいいよね〜」

「だね？ せっかくだから気合い入れて仕事しようと思って、ちょっと早めに来ちゃった」

「え？ やっぱそう？ 私も〜」

見ると、話し込んでいるのは全員独身の若い女性ばかりだ。

(なるほど、香りの原因は新社長か……)

凜子は一人そそくさと着替えを済ませ、ロッカー室を出た。

新しく来た社長が独身のイケメンとなると、女性社員のモチベーションも上がるということなのだろう。

凜子としては、正直彼のルックスなんてどうでもいい。大事なのは仕事ができるかどうか。さらに言えば、彼が経費精算のシステム化を許してくれるかどうかだ。

「白鷹紡績」では、経費の精算は例外を除き月に一度と決まっている。

毎月五日までに、かかった経費を項目をつけて申請書に記入してもらおう。それを経理でまとめ、合計金額を給与と同時に振り込むのだ。

その作業は、かなり手間がかかる。なのに、いくら申請しても、経費精算のシステム化は進まない。

実は、経費精算が月に一度となったのは、榎本がどうにか上に根回しをして承認を得た唯一の成
功事例だった。

凜子が入社した当初は、さまざまな経費が発生するたびに社員個々のタイピングで請求がなされていた。結果、経費精算ばかりに時間を取られ、ひどいときはそれだけで一日が終わってしまうことがあったくらいだ。

榎本の努力の甲斐あって、ずいぶん業務が簡素化した。しかし、やはり最終的には経費精算をシステム化して、さらなる効率化を図りたい。

そういった意味でトップ交代というのは、凜子にとってまたとないチャンスだった。

凜子は新たに書いた経費精算システム化に関する申請書を持って、榎本のデスクの前に立つ。

「部長、また電子化の申請をしてみようと思うのですが」

「ああ、例の経費精算の件かな？」

「はい、そうです」

凜子から渡された書類を受け取ると、榎本はそれに目を通しはじめた。

申請書を出すのはこれで五回目だ。しかし、今回用意したものは以前のものに比べてかなりブラッシュアップしてある。

新社長はアメリカ帰りである上に、年齢も若い。彼ならきっと、システム化することの意義を理解してくれることだろう。

システム化が叶えば、今現在やりたくても放置せざるをえなかった仕事に取りかかることができ
きる。

たとえば、他部署と連携を取って必要な情報を共有し、それを分析して会社経営にかかわる有益な提案をする、などだ。

そもそも「経理」とは、「経営管理」の略である。つまり経理は、経営状況を正しく把握して、健全な企業運営を維持し向上させる部署なのだ。その気になれば会社トップと同じ目線で物事を考えたり、今後の方向性を見定めるのに役立つ経営資料を作ることだって可能なはず。ただ、今はそれをやる時間がない。

そういった意味でも、一日でも早く経費精算のシステム化を実現させたいと思う。

パターン化した仕事をするだけでなく、もう一步先を目指したい。

申請が承認されれば、もつと会社の役に立つ経理部になることも可能だ。

「うん、わかった。さっそく上に出しておくよ」

榎本は顔を上げて凜子を見ると、申請書を「至急」と書いてあるトレイの上に乗せた。

「今度こそ承認されるといいんだがなあ」

そう呟く榎本の頭には、ここ最近白髪が目立ちはじめている。そのせいか、五十二歳という年齢よりも老けて見えた。時折りカバンから胃薬らしきものを出して飲んでいる様子も見られる。

部長職に就いている彼は、日頃上司として部下になにかと気を配ってくれている。

経費精算のシステム化に関しても、その重要性をきちんと理解し、実現するまで何度でも出してみようと言っている。けれど、出すたびに却下されているせいで、さすがにちよつと気弱になっているようだ。

これまで大きな失敗もなく勤めてきた凜子だけど、もし自分が「超合金」であることで彼にストレスを感じさせているとしたら……

そう考えると、部下として申し訳ない気持ちでいっばいになる。二兎の父親でもある榎本に、これ以上負担をかけたくない。

（今度こそ承認されますように！）

凜子は心の底からそう願うのだった。

次の日の朝、凜子はいつもより早くマンションを出た。

駅のホームは人影も少なく、電車の乗客も格段に少ない。座ることこそできないものの、車内は比較的空いていた。

ラッシュ時とは違って、今のような時間帯の電車であれば、いくぶんゆったりとした気持ちで会社に向かうことができる。

会社に到着しロッカー室に入ると、案の定まだ誰も来ていなかった。

（やっぱり早く来てよかった）

仮にいつもどおりの時間に出社していたら、昨日同様、部屋に充滿する香水の匂いと混雑は避けられなかっただろう。

イケメン新社長に色めき立つ気持ちはわからないでもない。おしゃれする女心だつて一応は理解できるが、所詮自分には関係ないことだと思っている。

準備を終え、ロッカー室を出る。経理部は、エレベーターホールを横切った向こうだ。凜子は、二基あるうちの手前のエレベーター前を通りかかる。ちょうどそのとき、ドアが開き、なかから男性が出てきた。

「おっと！」

男性とまともに体当たりしたような感じになり、バランスを崩しよろめく。

「あっ……」

倒れる――

そう思ったとき、伸びてきた腕が凜子の背中を支えた。

「ごめん――大丈夫か？」

軽く抱きとめられたような姿勢になると同時に、お互いの顔がほんの数センチの距離にまで近づく。

(えっ、氷川社長!?)

派手に転ぶのだけは避けることができた。けれど、まるで社交ダンスの決めポーズのような格好になっている。

(な、なにこれっ!)

支えてもらいながら体勢を整え、一歩下がってまっすぐに立つ。

「はい、大丈夫です。――氷川社長、おはようございます」

凜子はなんとか気を取り直し、軽く頭を下げて挨拶した。慎之介が、にこやかな微笑みを浮か

べる。

「おはよう、岩田凜子さん。君はいつも、こんなに早く出社するのかな？」

「いえ、普段は二十分ほど遅いです」

「今日はなにか用事でもあった？」

「特には……。少し余裕を持つようと思ったので」

さすがに本当の理由は言えない。しかし慎之介は、特に疑問を持たなかったようだ。

「ふうん、そうか。前をよく見ずに歩き出して悪かったね」

慎之介が言うには、前の職場ではエレベーターを下りて左手に執務室があったらしい。しかし、ここでいう左手には女性専用のロッカー室と、非常口のドアがあるだけだ。それにそもそも、社長室がある階ではない。

彼はそれに気づいたのか、ややバツが悪そうに肩をすくめている。フロアのボタンも、前の職場と間違っって押してしまったのかもしれない。

「上に行かれますか？」

「ああ」

慎之介の返事を聞き、凜子はエレベーターの操作ボタンを押した。幸いすぐにドアが開き、凜子は慎之介が乗り込むまで、ボタンを押したままそこに控える。

「ありがとう」

閉まりかけたドアの向こうで、慎之介がこちらに向かって小さく手を振ってきた。まるで友だち

に対するような親しげなそぶりに、凜子は心底面食らう。

ドアが閉まり、エレベーターが上階に向かって動き出した。

凜子は、経理部に向かいながら、つい今しがたの慎之介とのやりとりを思い返す。

出会って二回目。しかも、天と地ほども立場が違う相手に気軽に手を振るだなんて。

イケメンである上に、あれほどフレンドリーであれば、社長でなくてもモテまくっているに違いない。

(そういえば、どうして私のフルネームを知っているの?)

一瞬疑問に思ったものの、おそらく興味本位で「超合金」の人事データを閲覧したかなにかだろうとあたりをつける。

(……経費精算システム化の申請、承認してもらえるかな……)

一生懸命働いているつもりではいる。けれど、黒木との穏やかとは言えないやりとりを見られているので、性格面で難があると思われるかもしれない。

システム化については問題なくても、申請者が凜子であることを知り、二の足を踏まれたらどうしよう。

自分の性格が業務に支障をきたすことになるなら、今後は改善を考える必要がある。

そんなことを思いながら、凜子は慎之介を真似て小さく手を振ってみた。

(うわぁ、似合わない)

予想どおりの感想を抱かざるを得ない自分に、小さくため息を漏らす。凜子はスカートで掌を

こすると、足早に経理部に向かった。



「うーん……岩田凜子、か……」

穏やかな陽光が射し込む社長室で、氷川慎之介はパソコンの画面を眺めながら首をひねった。

そこには、凜子の写真付き人事データが表示されている。

第一印象は、悪くはない。

言っていることは正しいし、口調が硬すぎるくらいはあるものの凜とした態度は見えていますがすがしいほどだった。

それに、今朝エレベーターホールでぶつかったときの行動にも好感が持てた。

多くの人が慎之介の生まれや容姿を理由に低姿勢な態度になるなか、彼女は常に冷静で、突然のハプニングにも動じる様子はなかった。少なくとも、外見上は――

「賞罰なし、評価履歴問題なし。TOEIC八五〇、簿記検定一級、二級ファイナンシャル・プランニング技能士――なるほど」

仕事をてきぱきとこなす、いかにも真面目な人材。人事考課は概ね高評価で、事務処理能力は極めて高い。

一方、性格に関しては、柔軟性・協調性に欠け、融通が利かない傾向にある、などなど書かれて

いる。

「なるほど……だから『超合金』なのか？」

くるくるとペンを回していた指を休め、先ほど彼女を支えた左手を見る。

少なくとも、身体の感触は「超合金」のように硬くはなかった。むしろ柔らかかったように思う。

『超合金』ねえ……。でも、顔立ちは綺麗だ」

慎之介は記憶力がよく、一度見た人の顔は忘れない。

彼女がこちらを見る瞳はまっすぐで、美しい色合いをしていた。身長も自分と並ぶにはちょうどいい高さだ。

それに、ヘンに媚びたりするよりも不愛想なほうがいい。

慎之介に近づいてくる女性は、自分の魅力を最大限にアピールしようと躍起になっている人ばかりだ。なかには、わざと気のないそぶりをして逆に気を引こうとする女性もいるが、そういう見え透いたことをしても、すぐに魂胆がバレてしまう。

だけど、岩田凜子の自分に対する態度は、明らかに今までの女性たちとは一線を画していた。

それにしても、彼女に対して妙にインパクトを感じるのなぜだろう？

慎之介の左手の指が、凜子を支えたときに記憶した曲線を再現する。

少々アクロバティックな接触だったけれど、触れ合った瞬間に今までにない感覚を味わったのは確かだ。

(うーん……。俺の直感によると、彼女は『シロ』だ)

「シロ」とはつまり、犯人ではないということ。

慎之介は「白鷹紡績」の社長に就任するにあたり、同社の会計について独自に調査を進めていた。きっかけは、今からひと月ほど前の、ある休日に聞いた話――

慎之介はその日、行きつけの飲食店で友人と食事を楽しんでいた。そして、彼から「白鷹紡績」社長就任に対する祝辞をもらっていたとき、たまたま隣に座っていた老人が驚いた顔で声をかけたのだ。

『いやあ、こんなところで、もといた会社の新社長に会うとは思わなかったなあ』

老人は、名前を九十九一郎といった。

聞けば、彼は「白鷹紡績」を十年前に退職した元社員だという。

「白鷹紡績」は、北関東に自社製品を製造するための工場を所有している。従業員数はおよそ百五十名。工場運営は本社の製造開発部の管理下に置かれ、会計課は本社経理部と直結している。

九十九老人は過去四十年にわたりその工場に勤務しており、最終的には管理部長まで出世したところで定年を迎えた。

現在東京に住む娘夫婦と同居中の彼は、慎之介に、工場に関する昔話を面白おかしく語って聞かせた。九十九老人とすっかり意気投合した慎之介は、ぜひまた話が聞きたいと言って、彼と再会の約束までしたのだ。

その後、ふと思いついて、慎之介は彼の人事データを閲覧した。すると、驚いたことに九十九老

人はまだ退職扱いになっておらず、今現在も工場役職者として在籍中になっていることが判明する。不審に思った慎之介は、過去にさかのぼって、自社工場と本社「白鷹紡績」の退職者を閲覧した。その結果、九十九老人のほかに五名の退職者が、いまだ在籍扱いになっていることが明らかになったのだ。彼らはいずれも部長以上の役職についており、なかにはすでに亡くなっている人物さえいた。

(いったいどういふことだ?)

さらにおかしなことに、一日空けて再度データを見たときには、九十九老人を含む六名分の退職処理がきちんとなされていたのだ。

調べてみたところ、給与に関するデータが作られるタイミングで、この不審な処理がなされていることがわかった。

さらに調査してみたが、数字上、特に問題は発見できなかった。しかし、明らかになにかがおかしい。誰かが人事と給与データを改ざんして、不正に退職者の給与分を横領しているのではないか……

むろん、九十九老人をはじめとした退職者本人たちが、それを受け取っている事実はなかった。いずれにせよ、これは間違いなく不正行為だ。

これらのデータは、工場の会計課と本社人事部がやりとりをしており、実際の給与支払処理は「白鷹紡績」経理部が取りまとめて行っている。

つまり、「白鷹紡績」のどこかに、横領犯が潜んでいる可能性が高い。

本来ならば、すぐにでも「HAKUYOU」上層部に報告すべきだが、仮にほかにも不正が行われているとなると、安易に口外することははばかられた。

犯人は複数いるかもしれないし、上層部に横領犯の親玉がいなくても限らない。

慎之介は、就任早々経理に提出させた過去の書類とデータを閲覧し、工場の給与支払業務に携わっている社員をピックアップした。

そして、最終的に絞られたのは、役職者を含む四人の社員――

工場の会計担当者と工場長、および「白鷹紡績」経理部長榎本と、給与関係の担当者である岩田凜子だ。

経理部の二人については、榎本が人事部とのデータのやり取りを受け持ち、岩田凜子が実際の振り込み処理を担当している。

慎之介は今一度、目前の画面を、まじまじと見つめた。

岩田凜子――およそ横領に手を染めるような人間には見えない。

自分の人を見る能力から判断すると、彼女は「シロ」。

しかし、当然外見だけで横領犯ではないと断定することはできない。

先日閲覧した経理書類にはこれといった不備はなく、いずれも適正な処理がなされていた。ことに「岩田」と印鑑が押された書類については、経理関係書類のお手本と言ってもいいほどの出来だった。

だが、横領は確かに行われている。

自分が社長に就任したからには、そんな不正はぜったいに許さない。できる限り速やかに犯人を見つけ出し、真実を解明するつもりだ。

「確実に追い詰め、ぜったいに逃がさない——
「さて、どうするか……」

書類やデータ関連の調査を続行しながら、それとなく岩田凜子に接触してなんらかの情報を得るというのもひとつの手だ。

慎之介は、凜子の自宅住所に注目した。

「へえ、ご近所さんか」

見ると、彼女は自分が引越したばかりのマンションから歩いてすぐの場所に住んでいる。これもきつとなにかの縁だ。

「よし、少し近づいてみるか」

そう決めた慎之介は、まっすぐに前を見る凜子の写真に向かってにっこりと微笑みかけた。

◇ ◇ ◇

「村井さん、工場からきた在庫管理のデータ入力、終わりましたか？」

週明けの月曜日、凜子は経理部で唯一の後輩である村井のほうに向きなおった。彼は今年入社したばかりの新人で、デスクは廊下側にあるカウンター式キャビネットのすぐ横——凜子の左隣だ。

「はい、午前中のうちにはぶっちり終わらせましたよ。共同ファイルのなかに保存してあります」

ひよろりとした体型をしている村井は、二十五歳という年相応の顔をしたイマドキの男子だ。人懐っこい性格をしていて、すでに社内知り合いも多く、教育係である凜子にもはじめから臆することなく話しかけてくる。

「ありがとうございます。お疲れ様でした」

村井に一声かけると、凜子はパソコンに向きなおってそのデータを開く。そして、一目見ただけで数値がおかしいことに気づいた。

「村井さん。この数字、どこからもってきたんですか？」

凜子に言われ、村井がパソコンの画面を覗き込む。

「えっと……これですけど……あれ？ おかしいな……どこから違う数字をもってきたかな……」

にわかにあわてはじめた村井が、自分のデスクに戻りデータを調べはじめる。

「——あ、すみません！ 桁が……いや、数字も間違ってますね」

中途採用の彼は、前にいた会社でも経理部に所属していたという。多少とはいえ一応実務経験者だということで採用されたようだが、前職では実質雑用ばかりやらされていたらしい。やる気は人一倍あるし、頼まれた仕事を処理するスピードは速い。しかし、いかにせんミスが多く、それを平然と提出してくるからちよつと困りものだ。

「入力を終えたあと、確認しなかったんですか？」

「しました！ 二回確認しましたけど、確認漏れしちゃったみたいで……」

村井が大げさに肩をすくめ、ペコリと頭を下げた。

「じゃあ、今度から三回確認してください。村井さん、この間も同じようなミスをしましたよね」
「しましたよね〜」

村井の間延びた声。

凜子は彼の目をまっすぐに見て口を開く。

「私は村井さんが入力してくれたデータをもとに、月次の決算資料を作成するんです。会議ではその資料を使って協議がなされ、今後の経営方針が決まります。村井さんが入力するデータは、それほど大事な数字だということを自覚していますか？」

「はい……いえ、自覚、足りていませんでした」

村井はがっくりとうなだれて、肩を落とす。

ちょうど榎本は離席中だが、主任たちは二人とも席についている。誰だつて注意されているところを見られたくないだろう。凜子はできるだけ声のトーンを落とした。そのせいか、一層抑揚のないしゃべり方になってしまう。

「あなたがミスをして、それがそのまま会議室の資料になれば、会社は多大な不利益を被ることになるかもしれません。一桁の間違いが、億単位の損失を生む可能性だってあるんです。そうなる前に誰かがチェックしてミスを見つけてくれる——そういう考え方をしていると、いつまでたつても一人前になれないと思います」

「はい……」

村井が蚊の鳴くような声で返事をした。

本当は、こんなこと言いたくない。一見軽そうにも見える村井だが、本当は真面目な性格であることもわかっている。けれど、迅速に仕事をこなせたとしても、ミスをしては意味がないのだ。

そのたびに凜子に余計な手間がかかるのは事実だし、教育係としてそれを改善する方向にもつていかなければならない。

正直今の彼には安心して仕事を任せられないし、いずれ村井自身が困ることになるだろう。だからこそ、今厳しく言つて、一日も早くひとつの業務を担当できるよう成長してほしいと思うのだが……

「まあまあ、岩田さん。そのくらいにしておいたら？ 村井君もわざと間違つたわけじゃないんだからさ。なっ？」

二人の背後から、突然男性主任の谷が口を挟む。彼は三十代後半の既婚者で、デスクの上に妻の写真を飾っているほどの愛妻家だ。

「え？ あ〜いえ、僕は……」

村井がキョトンとした顔で凜子と谷を見比べる。

「いいからいいから。村井君、ちょっと一服しにいこうか。岩田さん、彼を借りていいかな？」

「はい、どうぞ」

凜子の返事を聞くと、谷は村井の背中を押しながら休憩室のほうへ歩いていった。ちらりところ

らを振り返った村井が、眉尻を下げて申し訳なさそうな表情を浮かべている。
(そのくらいにしておいたら……か。やっぱり、ちよつと言いすぎたかな?)

二人のうしろ姿を見送った凜子は、心のなかでそう呟く。

凜子の父親は、国語教師ということもあってか、日頃からきちんとした話し方をする。母親もまたしかりで、そんな両親に育てられた凜子は、小さい頃から比較的乱れない話し方をしていた。

それはそれでいいのだが、仕事をしているときの凜子の外見もあいまって、必要以上に硬く冷ややかに聞こえてしまうことがあるようだ。

決して意図的にそうしているつもりはないが、当人はものすごく怒られているように感じるのかもしれない。

(あれでも加減して言ったつもりだったんだけどな……)

次からは、もつと気をつけよう。

凜子はそう思い、データの間違いを修正した上で月次決算の書類作成に取りかかった。

「別に好きで教育係をしているわけじゃないのね。ミスを指摘して注意するほうだって、大変なんだから」

凜子の前の席に座る園田が、独り言のようにそう呟いた。表立ったかばい方をするわけではないけれど、彼女はいつも何気なく凜子をフォローすることを言ってくれる。

「すみません」

凜子もまた、独り言のようにそう呟く。

自分ももつとうまく村井を導くことができれば。

経理にやってくる他部署社員に対しても、もつと上手な物言いができれば。

そう思うにつけ、申し訳ない気分になる。

「やあね、岩田さんが謝ることないでしょ。……あ、社長だ」

園田が立ち上がるうとして、デスクに椅子をぶつけた。その拍子に、凜子のデスクから愛用のペ
ンが転がり落ちる。

「え？ 社長つてば、こっちに来る。まさか経理に用事があるの？」

園田の声を尻目に、凜子は床に落ちたペンを拾おうとした。それは、凜子が就職したときに父親
から贈られた大切な品だ。

少々あわててしまったせいか、拾おうとして一歩前に出たつま先でそれを蹴飛ばしてしまう。

(やだ、もうっ……)

床を滑るペンは、村井の椅子の下をぐぐり滑っていく。このままだとキャビネットの角にぶつ
かる。

大切な贈り物に傷がついてしまう――

そう思ったとき、ふいに伸びてきた指先がペンを止めて、そのまま拾い上げた。

「あ」

顔を上げると見えたのは、口元に笑みを浮かべている慎之介だ。

凜子はすぐさま姿勢を正して、彼に向かって会釈をした。

「お疲れ様です。社長、経理部になにかご用でしょうか」

我ながら、無機質で抑揚のない声だ。

「やあ、岩田さん。これは君の落とし物？ もしかしてゲレネットの日本限定品かな？」

ゲレネットは東欧のメーカーで、文具や一部の電子機器を販売している。一流ではあるが日本でその名を知る人はごく一部だ。

そんなマニアックな——しかも、数ある商品のなかの数量限定の品を見分けるとは。

「はい、そうです。よくご存じですね」

普段用件以外のことを口にしないう凛子だけど、このときばかりはついひと言付け加えてしまった。「僕もこのペンを持っているんだ。ゲレネット社の製品は、どれも長く使えば使うほど指になじんで手放せなくなる。これはすぐ綺麗なローズブラウンだね」

差し伸べられたペンを受け取ろうと、凛子は慎之介に近づく。

私物だから当然メンテナンスや替芯の購入は自分持ちだし、大切にしているがゆえに休日には自宅に持ち帰っているほどのものだ。

以前は同じ会社の電卓も持っていたけれど、人どぶつかった際に落として壊してしまい、今は別のもので使っている。

「ありがとうございます」

ペンを受け取ろうとしたが、なぜか慎之介が指を離さない。怪訝に思いペン先をもって軽く引く張ってみるが、彼の指がそのままくっついてくる。

(え、なに?)

凛子の眉間に、うっすらと縦皺が浮かんだ。

どうして、手を離さないの？

ワザと？ それともただの意地悪？

いずれにせよ、なにが面白くてこんなおふざけをしかけてくるのだろうか。

「これが発売されたとき、ぜったいに手に入れようと心に決めていたんだ。だけど、あいにく出張が続いて買いそびれてしまったね」

さっきまで凛子に注がれていた慎之介の視線は、いつの間にかペンのほうに移っている。

「見る」というよりも完全に「愛でる」感じだ。

(あ——もしかして、これを気に入ってしまったとか?)

そう思う気持ちは、十分理解できる。

しかも、今彼が手にしているものは、限定品ゆえにもうどこを探しても売っていないものだ。

「これは、私の父から贈られた就職祝いなんです」

(「譲ってくれ」と言われたらどうしよう)

そう思い、凛子はとっさに先手を打った。

ごく低い声で話しているから、周りには聞こえていないはずだ。

「そうか。なるほど……」

慎之介は、まだペンを離さない。

もしや、本当にこれを欲しがっている？

(ぜったいに無理！)

このペンは入社して以来、六年もの間苦楽をともししてきた宝物だ。そもそも、彼ほどの地位と財力をもってすれば、どうにかして未使用品を手に入れられるのではないだろうか。

凜子が身じろぎもしないでいると、ふっ、という微かな笑い声とともに、慎之介の指がペンから離れた。

「心配しないで。大丈夫、君から大切なペンを取り上げるつもりはないよ」

はっとして顔を上げると同時に、じっと見つめられる。慎之介の口元に白い歯が零れた。完璧で非の打ちどころのない笑顔とは、こういうのを言うのだろう。

「これを就職祝いにするなんて、君のお父様は素晴らしい審美眼をお持ちだ。……いや、偉そうに聞こえたら失敬。……名前入りということは、特注な買ったんだね」

「はい、そう聞いています」

「そうか。いいお父様だね」

目の下のなみだ袋の横に、綺麗な笑い皺がある。慎之介がペンに視線を戻したのをいいことに、凜子は彼の顔にまじまじと見入った。ふと気がつけば、周りからチラチラと窺うような視線を投げかけられている。

「拾っていただいて、ありがとうございます。おかげで傷がつかずに済みました」

ペンを受け取り、お礼を言う。慎之介の笑顔に、幾分名残惜しそうな表情が浮かんだように感じ

るのは、気のせいだろうか。

「どういたしました。ちなみに、この次の年に出たシリーズ最新の電卓は知ってる？」

せっかく話が終わりそうになっていたのに、またしても新しい話題をふられてしまった。

本当は適当に答えて早く席に戻りたい。けれど、今彼が口にした電卓は、凜子にとってペン同様特別に思い入れのあるものだ。

「知っています。創業百年を記念して限定販売されたものですよね？」

「あたり」

やっばり。

慎之介が言うゲレネック社の電卓——それは、凜子が就職して一年経った記念に、自分へのご褒美として思い切って買ったものだ。

普通の電卓であれば、高くてもせいぜい一万円以内で収まるだろう。けれど、ゲレネック社のそれは、特別多機能なものであり、なおかつ限定品であるために三万円を超えていた。

しかし、その大切な品を自宅に持ち帰る際に、人ごみのなかでそれをバッグごと落とし、踏みつけにされてしまったのだ。

「もしかして、持ってるのか？」

「去年まで仕事で使っていました。でも、落として、修理不可能なほど壊れてしまいました」

「そうか。じゃあ、今は違うものを使ってるの？」

「はい。新しく買おうにも、もう販売されていませんから」

やや丸みを帯びたフォルムに、使い勝手が抜群のキーの配列。打ち込むときの音は静かだけど、押ししているという感触ははっきりとしている。

それを使い始めて以来、事務処理の速度が格段に上がった。

だから壊れたときは、かなりショックだったし、どこかに売っていないかと今でもたまたまにネットを検索したりしている。

しかし、いまだに見つからないし、おそらく、もう二度と手に入らないだろう。

ほかの製品が悪いというのではないが、いまだにゲレネック社の電卓を懐かしく思い出してしまう。

「それは残念だったね。——ところで、社長室にあったベンジャミンの件だけど、前社長が個人的に買い取りたいと言ってるんだ。その件で後日また業者から連絡が入ると思う」

行方不明になっていたレンタルグリーンは、やはり誤って前社長が自宅に持ち帰っていた。そして、お手伝いさんによって同家の温室で大切に育てられていたらしい。

「迷子のベンジャミンの捜索、思ったより手間がかかってしまった。申し訳なかったね。前社長が、迷惑をかけたって謝っていたよ」

話し終えると、慎之介は顔を上げて何気なくあたりを見回す。

その途端、それまで様子を窺っていたらしい社員たちが、いつせいに身じろぎをした。

「そうでしたか。承知いたしました」

凜子は軽く会釈をして、その場を締めくくった。

「じゃあ、そういうことでよろしく」

慎之介は凜子に向かってにっこりと微笑むと、踵を返して遠ざかっていった。ほかの部署に立ち寄り様子がないところを見ると、わざわざそのことを言うためにここへ来てくれたのだろう。

(内線一本で事足りることなのに)

そうしなかったのは、前社長の謝罪を直接伝えるためだったのだろうか。

(結構、律儀な人なんだな……)

席に戻りながら、凜子は手渡されたペンをしっかりと握りしめた。心なしか、まだ慎之介のぬくもりが残っているような気がする。

「それにしても、かつこいいですよねえ。僕も社長みたいに、歩くだけで女性の視線を独り占めしてみたいなあ」

いつの間にか席に戻っていた村井が、感じ入ったような声を上げる。

女性のみならず男性まで魅了するとは——

彼がまどついている絶対的なオーラには、万人を惹きつけるカリスマ性も含まれているみたいだ。

「ね、社長となにを話してたの？」

デスクに戻ると、園田が待ちかねたように話しかけてきた。

「前に社長室にあったレンタルグリーンの件です」

「うん、それは聞こえたけど、その件以外にもなにか話してたんじゃないの？」

園田がなおも食い下がる。凜子は持っていたペンを、彼女の目の高さにかざした。

「使っている文具について、少し聞かれていたんです」

「ふーん……。岩田さんとあれだけ話し込むなんて、社長っているんな抽斗ひきだしを持つてるのね。そりゃ、ロッカー室が化粧品臭くなるはずだわ」

園田がおどけたように肩をすくめる。彼女も、ロッカー室の変化に気づいていたらしい。

「今朝なんか、秘書課のお局ぼくろ主任まで新しい香水を買い込んだみたいで——」

園田曰く、今朝のロッカー室も慎之介の話題で持ちきりだったという。

仮に彼女たちの一人が彼のハートを射止めたとしたら？

それこそ、絵に描いたようなシンデレラストーリーを実現させたことになるのだろう。

触らぬ神に祟たたりなし——

慎之介を巡る攻防については、その一言に尽きる。

とはいえ、もともと凜子には関係も興味もないことだ。今日は思いがけず一対一で話すことになったが、さすがにもう彼とかかわることなどないだろう。

凜子はスリープ状態になっていたパソコンを再起動させると、再び月次報告書の作成に取りかかった。

七月ははじめの金曜日朝。凜子はいつものように、駅に続く道を歩いていた。

大通りに出てまっすぐに進んでいると、うしろからやって来た白い車が凜子の少し前で速度を落とす。凜子が気にせずそのまま横を通りすぎようとしたとき、車が停車し、助手席側の窓が開いた。

そして、奥の運転席から身を乗り出すようにして、男性が顔をのぞかせた。

「岩田さん、おはよう」

「あ……社長、おはようございます」

少なからず驚き、凜子は足を止める。

「住まいはこの近く？ だったら僕とご近所さんだ。よかったら、会社まで乗せて行こうか？」

いきなりそんなことを言われ、凜子は反射的に首を横に振った。

「いえ、途中寄るところがありますから、私は電車で」

途中、昼食用にパンを買っていく予定だから、嘘は言っていない。まあ、たとえ用事なんかなくても、一社員である自分が社長の車で出勤などできるはずがなかった。

「そうか。ところで、傘は持ってる？ もうじき降り出しそうだよ」

「はい、折り畳み傘がバッグに——」

無意識に手を伸ばしたバッグのなかに、あるはずの傘がないことに気づく。

そういえば、今朝出がけに傘を準備したのはいいが、テーブルの上に置いたまま忘れてきてしまった。

（もう、私ったら間抜け……!）

凜子が口をつぐんだのを見た慎之介が、助手席のうしろに手を伸ばす。

「傘、ないんだったらこれを持っていくといい。ここで降らなくても、途中で降り出すと思うから」
慎之介の手には、黒い折り畳み傘が握られていた。会社の最寄り駅から社屋までの道のりには、

雨を避けられるようなものがなにひとつない。せつかくだし、ここは大人しく借りておいたほうがいいだろう。

「すみません、お借りします」

「うん、返すのはいつでもいいから。——じゃあ、気をつけて」

車が走り去り、凜子は再び駅に向かって歩き出す。慎之介が言ったとおり、電車に乗っている間に雨が降り出し、改札を出た頃には結構な土砂降りになっていた。

（傘を借りておいてよかった。それにしても、社長がご近所つて……。いったい、どこに住んでいるんだろう？）

あのあたりは、割と庶民的な地域だ。もしかすると、新しくできたタワーマンションだろうか。会社に到着して、まだ誰もいないロッカー室で着替えを済ませた。

濡れた傘は丁寧な水気を拭き取り、デスク横にぶら下げて乾燥させる。返すのはいつでもいいと言われたけれど、借りっぱなしはどうにも落ち着かない。

見るからに高級そうで、シャフト部分にいかつい獅子のロゴが彫り込んである。

（きつと外国のブランド品だよ。やっぱり、早く返そう）

その日は、取引先への請求書を作成し、来週予定されている役員会に提出する書類作りをした。その間に、イレギュラーな経費精算をこなす。

今日やってきたのは、繊維第二部のアルバイト社員だ。

持ち込まれたのは交際費の精算書だが、添付されている手書きの領収書には「お品代」と書いて

あるのみで、詳細がまるでわからない。これでは、次回の内部監査で問題になる可能性がある。

「詳細がわかるようであれば、次回からは領収書ではなくてレシートの添付をお願いします」

「え？ レシートでいいんですか？」

アルバイト社員は、わかりましたと言って帰っていった。

品目や単価が曖昧な手書きの領収書よりも、詳細が印字されているレシートのほうが証拠能力が高い。そもそもレシートでも経費精算は可能だし、問い合わせの手間を考えれば、むしろそちらを推奨したいくらいだ。

経理処理については、規程を交えて根気よく話せば、たいいていの人はきちんと理解してくれる。

しかし、黒木のようにいちいち突っかかってくる人はいるし、人事異動の時期は問い合わせの件数が各段に増える。

本社勤務であれば直接会って話もできるが、工場の精算分だとそうもいかない。電話をかけて根気よく説明するものの、やはりそれなりの時間がかかってしまう。

『さすが「超合金」だって言われるだけはあるなあ』

工場に電話をかけた際、顔を合わせたこともない社員からそう言われたときには、さすがに受話器を持つ手が小刻みに震えた。

（「超合金」……そう言われても仕方ないけど……）

ただでさえ冷たく聞こえる声は、受話器を通すとよけい冷ややかなものになるらしい。

凜子自身、それは自覚している。だから気をつけようとは思うものの、電話だとしても口調

が硬くなるのだ。それに、話すテンポが合わず、畳みかけるような言い方になってしまいがちだ。本社のみならず、工場にまで轟とどろいている凜子の「超合金」っぷり――

（それにくらべて、社長は――）

凜子の頭のなかに、昨日見た慎之介の顔が思い浮かぶ。

あの若さで、あの落ち着き。遙か上の年齢の部下を従えてもまるで違和感がないと同時に、どこか親しみと安心感を与える風貌。

それもこれも、育ちのいいイケメン御曹司だから成せる業わざなのだろうか？

だとしたら、庶民育ちで取り立てて美人でもない凜子には、到底真似できることではない。

（いるんだなあ、ああいうなにかもが特別な人って）

気持ち切り替えて、午後も引き続き役員会議用の資料を作成する。

「岩田さん、悪いけどこの書類、社長室に置いてきてくれる？」

榎本にそう頼まれたのは、一時間ほど残業をしたあとのことだ。快く応じて、過去の経理書類を手に十三階に向かう。

『たぶん、今社長はいないと思う』

そう聞かされていたから、別段身構えることもなく非常階段を上り、社長室のあるフロアに着いた。もう直接かわかることはないと思っていたのに、なんだかんだとこうして接点があるのは、社長自身の経理に対する関心の表れなのだろうか。

（だとしたら、経費精算システム電子化の件も、今度こそ承認がおりるかも）

そう思うと、足取りも軽くなるというものだ。

廊下一番奥の社長室は、入り口ドアがある壁が全面ガラス張りになっている。

（あれ？ まだ在室中だ）

部屋の窓際に立つ慎之介が、こちらに背を向けて誰かと通話しているのが見えた。

もれ聞こえてくる言葉は、英語だ。内容からして、通話先は海外の取引先だろう。しかも、口調から判断するに、あまり喜ばしくない内容みたいだ。

（どうしよう。一度引き返したほうがいいかも……）

凜子が、そっと踵かかとを返そうとしたとき、慎之介がふいにドアのほうに向き直った。

即座にびつたりと視線が合う。

慎之介との距離は、およそ五メートル。ガラス越しで、かつそれだけ離れているのに、彼が自分を見る目力の強さに思わず息が止まる。

そこには、いつも見せている穏やかな笑顔はなかった。そればかりか、怖いくらい真剣な表情を浮かべている。

（あれが社長？ 雰囲気まるで違う……）

間違いなく同一人物だし、端正な顔であることにも変わりはない。しかし、浮かんでいる表情や印象が、別人級に違っている。

視線を合わせたまま話す慎之介の眉間まゆまに、深い皺が刻まれている。聞いたこともない単語と低いトーンの声に、自然と身体がこわばっていく。